

「うらみ」について

天理教では、親神の思いに沿わない人間の心遣いを「八つのほこり」として教えられている。その一つに「うらみ」がある。ところで、「みかぐらうた」十下り目では「なんぎするのこゝろから／わがみうらみであるほどに」と、我が身に「うらみ」を向けること自体は掃除すべき「ほこり」として示されているわけではない。つまり、「うらみ」という語は「八つのほこり」よりも広く用いられていると考えられる。そして、このことは「おふでさき」にもいえるであろう。そこで、今回は、「おふでさき」において、「うらみ」という語がどのように用いられているのかを考察していきたい。

まず、辞書的な意味を確認しておく。『岩波古語辞典』では、「うらみ」（恨み・怨み）とは、「相手の仕打ちに不満を持ちながら、表立ってやり返せず、いつまでも執着して、じっと相手の本心や出方をうかがっている意。転じて、その心を行為にあらわす意」とされている。また、その語源については、「ウラ（心の中）ミル（見る）」と推測されている。

さて、「おふでさき」では、まず六号の95の歌にある。

一れつハみなへわがみきをつけよ
月日ゑんりよわさらないぞや（六号93）
なにもかもせへいゝバいにことわりて
それからかゝる月日しことを（六号94）
とのよふな事もうらみにをもうなよ
みなめへへのみうらみである（六号95）
このはなしたんへくどきつめてある
これしいかりときゝわけてくれ（六号96）
一れつハみなめへへのむねしたい
月日みハけているとをもゑよ（六号97）
月日よりしんぢつ心みさだめて
うけとりしたいかやしするなり（六号98）

ここでは、「みかぐらうた」とほぼ同じ意味合いで、「銘々の〔我が〕身恨み」という言葉で、それぞれの人が自分自身を省みるように促されている。親神は、その親心が分からない人間、とりわけ信仰の道を邪魔する権力者に対して、親神の守護が納得できるように天災地変のような人智を超えた親神の大きな働きを示そうと歌われており、その為、どのような事が起きても「うらみに思ふなよ」、そうした災難の原因は詰まるところ人間の心にあるのだから「銘々の〔我が〕身恨み」より外にないと論されている。

こうした「我が身恨み」という意味合いでは、六号の他に十三号108で「人をうらまず。我が身うらみである」と歌われたり、十六号30や十七号60で「どのような事があっても、〔自分以外の者や事柄そのものを〕うらまないように。すべて銘々がしている事〔の結果〕である」と歌われたりしている。とりわけ、十七号では、親神の特別な恵みを受ける台としての「甘露台」の建設が順調に進まないことを「ざんねん」に思われて、人々の胸の掃除をすると歌われている。

また、十二号では、教祖の言葉に関連づけて「うらみ」という語が使われている。

いまなるの月日のをもう事なるわ

くちわにんけん心月日や（十二号67）
しかときけくちハ月日がみなかりて
心ハ月日みなかしている（十二号68）
こればかりうらみあるならとのよふな
事も月日かみなかやすてな（十二号69）
どのよふな事をゆうのもみな月日
にんけん心さらにまぜんで（十二号70）

67・68の「くち」とは教祖の口であり、親神がその口を借りて教を説いていることの意である。その際、教祖の心は親神（月日）の心であることも示されているが、次の69でそのことに対して「うらみ」を持つ場合が歌われて、70で「教祖の口を通してどのような事を言っても、それは親神が言っているのであって、決して人間が思うような心で言っているのではない」と説いている。教祖から教を聞いても、それを人間が言っているように受け取って何か不満に思うとき、その者にはそうした心に応じた事柄が起きてくると注意されている。

さて、こうした「うらみ」という語句で示されていることを鑑みて、我が身を振り返ってみよう。自分に与えられたもの、自分の置かれている立場、あるいは自分の身に起こってくる事柄に対して、それを神からの仕打ちとして不満に持ち続けること。また、人から教祖の教を聞いても、「教祖はひどいことをおっしゃる」と言って不満に思うこと。あるいは、教祖はやさしい方に違いないが、教を伝える人の言い方がひどいとうらみ続けること。「うらみ」とは、自分の不満を自分の心遣いに帰さずに、それ以外に原因を求める態度といえるかもしれない。この不満は我が心から決して消えない、という心に気づけない自分がある。

ところで、そうして自分の心に原因をもとめていくと、ときに、どこか辛くなったりするかもしれない。というのも、自分の心を変えなければならぬと分かっているにもかかわらず、自分ではなかなか変えられない、という経験を我々は知っているからだ。変えたくても変えられない苦しみがある。しかし、「我が身うらみ」というのは、「自分のせいにする」ことや「自分を責める」こととは違うといえる。「自分のせいにする」というのは、実のところ「人のせいにする」ことの裏返しで、「人のせいにする」の「人」の箇所を「自分」（しかも「自分が想像する自分」）を当てはめて、自分だけで自分を見つめている状態といえよう。自分だけで自分を処理しようとするから、結果どうしようもできず、とりあえず自分を責めることに終始せざるを得なくなっているのではないだろうか。

誰しも美しいものは受け入れても汚いものは遠慮したい。自分を反省して、自分の「ウラ（心の中）ミル（見る）」と、なるほどその本心は汚い。よって、受け入れたくない。そこで、臭いものにフタをするように、自分の本心もそのままにしておく。周りに多少臭い思いをさせるかもしれないが、誰しも心の掃除なんてできないのだから、それくらいいいだろうと、汚いことを公然の事実として開き直る。…としても、そうした心もまた一つの心遣いなのだから、親神としてはやむを得ず、その心通りの働きを返さざるを得ないと「おふでさき」は歌っている。